

僕の妹

伊藤 太陽

「太陽君、太陽君。」

妹は僕をこうよびます。ニコニコしながらよばれると、僕も自然とニコニコしています。

小学生になった妹と毎日学校へ通うのがうれしです。でも僕は、先生の話を聞いていなかったり、忘れ物をしたりするので、よく注意されます。注意されているところをみられた事もあるし、僕の友達から妹に、

「今日、太陽さん先生にしかられていたよ。」

と言われる事もあるようです。

だから妹が、僕のせいでいやな思いをしていないか心配していました。そんな時、妹が母にこんな話をしているのを聞きました。

「はなちゃん、太陽君が学校でしかられているのを見ても、お友達から太陽君がしかられた事を聞いても大丈夫だよ。だって太陽君と一緒にいいから。太陽君の事大好きだからね。」

僕は風せんが突然、

「バーン。」

と割れた時と同じくらいおどろきました。妹がそんなふうにしていてくれるなんてそうぞうがつきませんでした。

「ありがとう。」

となかなか言えないので、僕は妹の重い荷物を持ってあげようと思いました。洗たく物をたたむ妹のお手伝いを助けてあげようと思いました。妹が喜ぶ顔が見たくなりました。

夏休みに入って、僕のホウセンカも妹のあさがおも毎日元気に育っています。僕は毎日、妹と一緒に水やりをしています。僕のホウセンカは白い花を、妹のあさがおは、むらさき色の花を咲かせています。妹はきれいなあさがおを見て喜んで、二人で、

「のどがかわいたからお水をどうぞ。」

と言って水やりをしています。

僕はあまり兄らしい事は出来ません。でも最近妹といふ時に分かった事があります。何かをしてあげようと思つてするよりも、妹の笑顔を見た時のポカポカな気持ちを思い出せば良い事に気づきました。

僕は、白いホウセンカのように笑う妹、時には、夏の空にひびきわたる花火のように笑う妹のえんの下の力持ちになりたいです。僕の事を大好きと言つてくれた妹への感謝の気持ちを大切にしていきます。